

その一 倭城台（ウエソンデ）

暑い夏が峠を越えたようだ。京城（現ソウル特別市）の街には、ほんの少し秋の気配が感じられる。

執務室から街を見下ろすと、日本人の瓦屋根の建物が山側から平地側に次々となだれ込んでいるように見える。平地側は背丈の低い草屋根が野原のように広がっている。朝鮮人が住んでいる家々だ。

その家々のかなたに景福宮が浮かんでいる。十二年前に消滅した朝鮮王朝の王宮である。正殿前では総督府の新庁舎の工事が進んでいる。遠目にも確認できるようになった。朝鮮人の街に楔（くさび）を打ち込んでいるように見える。

第三代朝鮮総督の斎藤実（さいとう・まこと）は、三年前の一九一九年九月初めに赴任した日から、執務室から京城の街並みを眺めてきた。朝鮮人は南山の中腹のこの場所をウエソンデ（倭城台）と呼ぶ。「日本人の城が

ある丘」という意味なのだが、「台（ダイ）」を「デ」と発音するのは、まるで東北訛りのように聞こえる。岩手出身の斎藤にはどこか懐かしい。

斎藤は、京城に着いたその日、命を失いかけた。

三月に発生した騒擾からまだ半年、京城の南大門駅（現在のソウル駅）に着いた。厳重警戒の中、専用出口を抜け、駅頭で妻とともに盛大な出迎えを受けた。馬車に乗り込み出発しようとしたとき、馬車の左後方で爆発が起こった。数人が倒れていた。後続馬車の馬が暴れている。爆発物の破片が当たったのだろう。

軍人の斎藤は、次の攻撃があるのか素早く見渡した。その気配は感じられない。混乱は間もなく収まるはずだ。

斎藤は、隣に座っている妻の春子の手をしっかりと握った。

『大丈夫か？』

『あなた、ここが・・・』

春子が持ち上げた白い軍服の脇腹を見ると、焼け焦げた穴が空いていた。爆弾の破片が軍服をかすめて行ったのだ。背中を冷たいものが流れて行った。

二週間後、朝鮮警察トップの警務局長が執務室にやってきた。

『本日、総督に対する爆弾投擲犯を本町警察署が逮捕いたしました。六十五歳の朝鮮人です。新任総督の殺害を謀り、ウラジオストクから爆弾を持って上京してきたとのこと。詳しい事実関係は、厳重に取調べ中であります。』

『分かった。よく逮捕した。民心をよく踏まえ、無茶な取調を行わないよう、現場をしっかりと指導していただきたい。』

『了解いたしました。』

警務局長は、少し意外そうな表情で部屋を出て行った。警備の強化を指示されると思ったのだろうか。あるいは「犯人を徹底的に取

り調べろ」との厳命でも予想したのだろうか。

朝鮮の全人口千八百万人のうち内地人は四十万人しかいない。内地人の割合が朝鮮人より多い所は、大田のような官庁中心の街か鎮海のような軍隊の街ぐらいのものだ。釜山は内地人が五割弱、京城は三割弱、農村部では内地人といえは村の駐在しかないところもある。このような地域で朝鮮人の暴発が起これば、内地人はすぐに生命の危険にさらされる。内地人は心の根底に恐怖心を持たざるを得ない。この恐怖心が支配者意識に加わり、余計に朝鮮人を威圧したり威張ったりすることになり、これがまた朝鮮人の怒りを引き起こす。

朝鮮統治の安定には、まずは朝鮮人と内地人の心の融和が必要なのだ。

朝鮮に赴任した年の六月、陸軍大臣の田中義一（たなか・ぎいち）が自宅に訪ねてきた。この日から運命が変わった。

山本権兵衛内閣の海軍大臣だった斎藤は、いわゆるシーメンス事件によって内閣総辞職

に伴い大臣辞職。まるで懲罰のように予備役に編入され、国政どころか海軍からも放逐された。その日から五年、一人の民間人として静かに暮らした。長い年月は、長男らと北海道で農場経営する夢を育ませた。

『朝鮮に新任の総督として行ってほしいのです。』

陸軍大臣の言葉は唐突だった。斎藤は静かに答えた。

『国政に戻るには歳を取り過ぎました。悠々自適の暮らしに慣れ、もはや激務を担うことはできません。』

しばらくすると、今度は首相の原敬（はら・たかし）がやってきた。故郷・岩手の先輩であり、海軍に勤務していた若い頃、外務省勤務の原に何かとお世話になった。

『陸軍大臣がいらした件ですか？』

『そのとおり。』

『私が朝鮮でできることは何もないですよ。』

台湾を見事に治めた後藤新平さんなど植民

地統治の人材はたくさんいるように思いますが。』

『後藤を起用できるぐらいなら私も苦勞しないよ。後藤なら台湾や満鉄で業績をあげた。この三月からの朝鮮の騒擾もうまく収めるだろう。』

しかし、私の党（政友会）には後藤新平の起用に賛成する者はいない。彼から煮え湯を飲まされてきた者が多すぎる。

今回の人選は、色々な経緯がある。軍人はダメだ、民間人起用をという声も多かった。山県（有朋）公は、陸軍出身者に最後までこだわったが、君ならばやむを得ないと折れた。他の者では、まとまらない。』

齋藤は首相の話をも黙って聞いていた。

『その代りと言っては何だが、台湾や満州などで後藤と一緒に仕事をした連中を朝鮮に送る。君の副官である政務総監には秋田出身の水野錬太郎を充てる。内務省の生き字引で法制にも詳しい。理屈が先に立つ型だ

が、老練なところもある。朝鮮の新しい統治方針も彼に任せておけば着々と進めてくれるだろう。

内務大臣経験者でもあり、次官級の政務総監は不釣合いだと言っていたが、先日ようやく納得した。部下の人事を全て任せてくれるなら引き受けてもよいとのことだ。秘書官をはじめ有能な官僚の人選に入っている。気心の知れた東北出身者が多くなるはずだよ。』

在りし日の原敬の顔が京城の街と重なって見えた。

原は、朝鮮統治を「武断政治」から「文化政治」に転換する一連の朝鮮対策を進めようとしていたが、文化政治の完成を見ないまま、昨年十一月に東京駅で刺殺された。

五年も政界から離れていた斎藤にとって、国を治める技量に長（た）けた原は新鮮だった。様々な意見から重要なものを選び出し、新たな政策にまとめ上げる希代の政治家にな

っていた。斎藤は、首相官邸と政策協議をするたびに原から多くを学んだ。

原敬暗殺の知らせを受けたとき、斎藤は、故郷の先輩を失ったこと以上に、この国の羅針盤が失われたことを嘆いた。

世界が揺れ動いている。ロシア王朝の崩壊とボルシェビキ政権の成立、共産主義の脅威、シベリア出兵、国際連盟発足、アメリカの台頭とヨーロッパの疲弊、ドイツの賠償金問題、清朝滅亡後の中国内乱の激化、国内の経済恐慌など、暗闇の中を誰かが日本の舵取りをしなくてはならないのだが。

ドアをたたく音がして、斎藤の部屋に庶務部長と秘書が並んで入ってきた。

「総督、来週の日程につきましてご説明させていただきます。」

定例の十五分ほどの説明が終わるころ、守屋部長が言った。

「今週は内地より珍しい方が総督との面会を希望しております。青森出身の今和次郎



（こん・わじろう）氏と秋田出身の小田内通敏（おだうち・みつとし）氏であります。小田内氏は、水野前政務総監の同郷で、早稲田大学講師です。昨年来、総督府社会課から委嘱を受けて朝鮮部落調査を担当しています。今氏は、早稲田大学建築学科教授で、今回、小田内氏の調査を建築学的な視点から補足するため調査を行うとのことですよ。」

齋藤は書類から顔を上げ、宮城出身の守屋の丸い顔をチラリと見た。